

令和 6 年 6 月 17 日現在

機関番号：33908
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2023
課題番号：19K20568
研究課題名（和文）世界遺産の参詣道「熊野古道」を歩くことで得られる意味深い心理的経験の実証研究

研究課題名（英文）Psychologically deep experience while walking on the World Heritage pilgrimage route, Kumano Kodo

研究代表者
伊藤 央二（Ito, Eiji）

中京大学・スポーツ科学部・准教授

研究者番号：00736861
交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,364,800円

研究成果の概要（和文）：世界遺産の参詣道である熊野古道を歩くことで、意味深い心理的経験である感嘆経験を得られるかを明らかにすることを研究目的とした。3つの調査研究から、日常のウォーキングでは感じる事が難しい感嘆経験を、熊野古道を歩くことで得られることが認められた。特に、観光パンフレットを通しての熊野古道に対する理解は、VR動画視聴から得られた感嘆経験に影響を及ぼさなかったが、語り部による情報は実際に熊野古道を歩いた際の感嘆経験に影響を与えることが明らかになった。熊野古道を歩くことで得られる感嘆経験を向上させるためには、深い知識を提供する語り部が重要な役割を担うことが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

世界遺産の参詣道である熊野古道を歩くことやそのVR動画視聴を通して感嘆経験が得られること、観光パンフレットよりも語り部の情報の方が感嘆を喚起できる可能性が高いことを明らかにした点は学術的にも社会的にも有意義であったと考えられる。また、自己報告測定で認められた感嘆経験に対する語り部の影響は、生理心理学的指標である唾液アミラーゼには反映されなかった。自己報告測定と生理心理学的測定の間で対照的な結果が得られたことは、調査設定（実験室、観光地、等）が観光経験に影響を与えることを示唆している。コロナ禍が収束し、インバウンド観光が回復するなか、国内観光分野における感嘆経験のさらなる知見の蓄積が求められる。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to examine whether walking on Kumano Kodo, a World Heritage pilgrimage route, evokes awe experiences, one of the psychologically deep experiences. The three studies revealed that walking on Kumano Kodo provides awe experiences that are difficult to achieve through daily walking. In particular, greater understanding of Kumano Kodo gained through reading a tourist brochure did not influence awe experiences evoked by a virtual reality video of a Kumano Kodo walk. On the other hand, information provided by a kataribe enhanced awe experiences during the actual walk. These results suggest that kataribes, who offer in-depth knowledge about Kumano Kodo, play an important role in enhancing awe experiences while walking on Kumano Kodo.

研究分野：観光学

キーワード：スポーツツーリズム 観光行動 感嘆経験 世界遺産 巡礼道 熊野古道 ガイド 生理心理学

1. 研究開始当初の背景

日本では、新型コロナウイルス感染症パンデミック以前から、ラグビーワールドカップ、東京オリンピック・パラリンピック、ワールドマスターズゲームズという国際的スポーツイベント開催に伴い、スポーツツーリズムが脚光を浴びてきた (Hinch & Ito, 2018)。しかし、イベント期間中だけではなく継続的に観光客を呼び込むためには、アクティブスポーツツーリズム(週末や休暇でのスポーツ参加を目的とした観光)が、2020年以降のスポーツツーリズムの持続的発展の鍵となる(原田, 2016)。特に、森林率7割弱を誇り、6,000以上の島を持ち、アウトドアスポーツ資源の宝庫と呼ばれる日本において(原田, 2016)アウトドアスポーツツーリズムはこれらの国際的スポーツイベント後のスポーツツーリズムの発展において重要な役割を果たすことが予想される(Ito, 2020; 伊藤, 2020a)。実際に、笹川スポーツ財団(2016)のオンライン調査における「今後スポーツ実施を伴う旅行をする場合、どのような種目を実施したいですか?」との問いに対し、上位5種目中3種目(i.e., スキー・スノーボード、海水浴、登山)がアウトドアスポーツであった。加えて、日常の種目別運動・スポーツ実施率において、「散歩(ぶらぶら歩き)」と「ウォーキング」が2006年から2016年の10年間でそれぞれ変わらず1位と2位を推移し続けていることから(笹川スポーツ財団, 2017)手軽に行えるアウトドアスポーツの1つとして、自然での野外ウォーキングが注目される。ウォーキングは高次元の競技性(e.g., 対戦相手との競争)に根差したスポーツではないが、過去の自分自身との競争(e.g., 歩くスピード、距離、姿勢)といった低次元での競技性に当てはまり、このようなレクリエーションスポーツを含む包括的アプローチは、スポーツツーリズムの文脈において重要視されている(Higham & Hinch, 2018)。

観光の視点から野外ウォーキングを考察する際、野外ウォーキングを実施する場所自体が観光地として成り立っている事例が存在する。国内における事例では、「紀伊山地の霊場と参詣道」として世界遺産の一部に登録された熊野古道が挙げられる。2001年に世界遺産に登録された熊野古道は、熊野本宮大社・熊野速玉大社・熊野那智大社からなる熊野三山を目的地とした参詣道であり、古来より天皇から貴族、庶民に至るまであらゆる身分の人々を受容した「祈りの道」という点から一般的なウォーキングコースと異なり、観光地として国内外から多くの観光客を惹きつけてきた。また、熊野古道が持つ歴史的・宗教的背景の周知という面に関して、1986年に「紀州語り部の会」(現熊野本宮語り部の会)が組織され、観光ガイドの養成が行われてきたように、世界遺産登録以前から熊野古道に沿った各地域において観光客をガイドする語り部の活動が活発な観光地として報告されている(寺田, 2019)。このような熊野古道が持つ歴史的・宗教的背景を踏まえると、古からの参詣道を歩くことは、身体的および心理的にポジティブな影響をもたらす、それが熊野古道の魅力となっていることが指摘されている(長野・伊藤, 2018)。実際に、和歌山県では世界遺産の熊野古道を活用したヘルスツーリズム(e.g., 熊野古道健康ウォーク)が展開され、注目を浴びている。

このような観光や野外ウォーキングを包括するレジャー活動は、快感情の向上や逃避など、さまざまな心理的経験を私たちにもたらすことが報告されている(Ito, 2020; Mannell & Iso-Ahola, 1987)。レジャー学では心理的経験の中でも、快感情(e.g., 興奮)のような一般的な心理的経験と「意味深い心理的経験(psychologically deep experiences)」と呼ばれる特別な心理的経験を区別している(Mannell, 1996)。意味深い心理的経験としてフロー経験やスピリチュアル経験等が報告されているが(Fenton & Walker, 2016)近年、アウトドアツーリズムの文脈において調査対象となっている感嘆(awe)も意味深い心理的経験の1種として捉えることができる(Powell et al., 2012)。感嘆は、現在の心的構造を圧倒する壮大さ(vastness)に対する感情反応である(Keltner & Haidt, 2003; Shiota et al., 2007)。壮大さをもたらす刺激には、自己、これまでの経験、そして価値判断と行動の基準枠より大きいと感じるすべてのものが含まれる。一般的には、自然の物理的な大きさ(e.g., グランドキャニオン)が挙げられるが、榮譽や権威といった経験的な刺激まで含まれる(Keltner & Haidt, 2003)。また、数式の深遠さ(Shiota et al., 2007)や出産体験の神秘さ(Wang et al., 2020)も壮大さとして捉えることが可能である。加えて、従来の自身の理解を凌駕してしまう壮大さは、認知的な調節(accommodation)の欲求を促すことが明らかにされている。このプロセスでは、既存の価値観と感嘆喚起経験のずれに注意が向けられ、このずれを小さくする(なくす)ために新たな価値観が生み出される(Shiota et al., 2007)。この「壮大さ」と「調節」という2つが感嘆を構成する核となる要素であると、これまでの心理学の研究(Keltner & Haidt, 2003; Shiota et al., 2007)から明らかにされてきた。

感嘆経験は日常の生活圏から離れるスポーツツーリズムを含む観光行動と非常に密接な関連性があると考えられる(Coghlan et al., 2012)。アウトドアツーリズム(Pearce et al., 2017; Wang & Lyu, 2019)や巡礼観光(Lu et al., 2017)などのさまざまな観光文脈で感嘆経験は研究されてきた。アウトドアツーリズムでは、Pearce et al. (2017)が観光客への面接調査を通して、5つの感嘆経験(海洋生物、審美的、生態的現象、壮大な地理的景観、内省的/大局的瞬間)を明らかにしている。また、Wang and Lyu (2019)は観光経験が感嘆をもたらす、それが環境配慮行動に結びつくことを報告している。巡礼観光では、Lu et al. (2017)が仏教の聖地とされる中国四川省の峨眉山への観光者を対象に質問紙調査を行い、「自然環境の壮大さ」と「宗教的雰囲気的神聖さ」が感嘆を喚起し、観光満足度にポジティブな影響を与えていることを明らかにしている。加えて、

巡礼観光者と非巡礼観光者の違いに注目し、巡礼観光者の感嘆経験は「宗教的雰囲気的神聖さ」によってもたらされる一方、非巡礼観光者の感嘆経験は「自然環境の壮大さ」によってもたらされることを明らかにしている。先述した通り、本研究の調査対象地である熊野古道は、峨眉山と同様、巡礼観光地であり、一般的なウォーキングとは異なる心理的経験をもたらすことがうかがえる。

また、このような感嘆経験を観光の文脈で精査する場合、観光ガイドによる影響も予想される。Shiota et al. (2007) の自然のパノラマ風景などの情報が豊富 (information-rich) な刺激が感嘆経験をもたらすという指摘を考慮すると、観光ガイドである語り部の活動が活発な熊野古道では (寺田, 2019) 語り部からの熊野古道の歴史文化に関する説明を通して、感嘆経験がより強いものになるかもしれない。これは心理学において「先行刺激によって後続の刺激の処理が促進される現象」(川口, 1995, p. 225) と定義されるプライミング効果と重なるものがある。実際に、Moorhouse et al. (2017) は野生動物観光アトラクションの研究において、野生動物保護情報に関するプライミングが調査参加者の観光行動意図にポジティブな影響 (粗悪な野生動物観光アトラクションへの訪問意図低減) を与えていることを明らかにしている。語り部を含む地元の観光ガイドは、持続可能な観光開発に必要な不可欠であり (Salazar, 2012) 彼らの役割を感嘆の喚起という視点から精査することは重要であると考えられる。

加えて、感嘆経験はコロナ渦で注目を浴びた VR (バーチャルリアリティ) を用いた研究でも知見が蓄積され始めている。Chirico et al. (2016, 2017) は、感嘆研究における VR の利点として、臨場感、複雑な刺激の生成、そして生理心理学的データの収集、を挙げている。彼らの研究において、Chirico et al. (2017) は、一般のモニター画面での視聴と比較して、VR 動画の視聴の方が、より高いレベルの感嘆を喚起できることを報告している。関連して、これまでの多くの感嘆研究では、質問紙調査による自己報告測定が用いられてきた。この調査法は、簡易かつ費用対効果に優れるが、回想や社会的望ましさ等によるバイアスの影響を受けやすい (Li et al., 2015)。このような限界を克服するために、より客観的で偏りのない生理心理学的測定を取り入れることが観光学でも注目されており (Li et al., 2015) 感嘆経験に焦点を当てた VR 観光研究でも鳥肌などの生理心理学的指標が用いられている (Quesnel & Riecke, 2018)。現地調査では、Komori et al. (2017) が熊野古道を歩くことによる交感神経機能に関連する影響を唾液アミラーゼの変化に着目して研究している。Komori et al. (2017) の研究では、熊野古道歩行前後で唾液アミラーゼの変化に有意差は認められなかったが、感嘆経験については調査されておらず、その関連性は未検証である。

以上を踏まえ、スポーツ庁が推進するアウトドアスポーツツーリズムにおける感嘆経験を、世界遺産の参詣道である熊野古道を調査地として、語り部の役割という視点から明らかにすることは、国際的なスポーツイベント開催後のスポーツツーリズムの持続的発展を目指す日本において、非常に有意義な研究テーマであると考えられる。さらに、本研究テーマを近年の観光学研究で注目される VR や生理心理学指標を用いて検討することは、観光研究の発展にも繋がること期待される。

2. 研究の目的

世界遺産の参詣道である熊野古道を歩くことで、意味深い心理的経験である感嘆経験が高まるかを明らかにすることを全体の研究目的とした。本研究目的を達成するために、研究 1、2、3 を実施した。各調査の目的は、研究 1: 熊野古道を語り部と歩くことが感嘆経験につながるかを質的に明らかにすること、研究 2: 熊野古道に対する理解が熊野古道 VR 動画を視聴した時の感嘆経験に与える影響を自己報告測定および生理心理学測定から明らかにすること、研究 3: 熊野古道を歩くことで得られる感嘆経験における語り部の影響を自己報告測定および生理心理学測定から明らかにすること、とした。

3. 研究の方法

研究 1: 2019 年 11 月 9 日~12 日にかけて、和歌山県において 60 歳以上の人々が中心となってスポーツや文化などのイベントで交流を深める「第 32 回全国健康福祉祭和歌山大会 ねんりんピック紀の国わかやま 2019」(以下、「ねんりんピック 2019」とする) が開催された。ねんりんピック 2019 大会実行委員会では、大会参加者向けの 13 の観光ツアーを提供し、そのうち 2 つのツアーが熊野古道を語り部と共に歩く旅程を含むものであった。そこで、これら 2 つの観光ツアーへの参加者 (日帰りツアー 64 名、宿泊ツアー 26 名) を対象に、直接配布直接回収法を用いた質問紙調査を各ツアー終了後に実施した。日帰りツアーは熊野那智大社から大門坂を歩くコース (約 2.7km) であった。宿泊ツアーは熊野古道館から近露 (1 日目) および熊野那智大社から大門坂 (2 日目) を歩くコース (約 15.7km) であった。調査参加者に「今回、熊野古道を歩かれて感じたことや普段のウォーキング (トレッキング含む) と違った経験等ございましたら、お聞かせください」と尋ね、得られた回答を電子データ化した。その後、Pearce et al. (2017) の 5 つの感嘆経験のカテゴリーを先行研究および熊野古道の文脈に合わせ修正し、演繹的コーディングを行った。

研究 2: 2022 年 7 月から 10 月にかけて、中京大学スポーツ科学部の学部生を対象に、熊野古道を歩く VR 動画を視聴してもらい、視聴後に質問紙に回答および視聴前後に唾液アミラーゼ採取

をしてもらった。参加者は、熊野古道の観光パンフレットに目を通し、熊野古道で撮影した VR 動画であることを知ったうえで視聴する介入群と、熊野古道の説明は全く受けず、VR 動画が熊野古道で撮影されたことも知らされずに視聴するコントロール群に分類された。感嘆の質問項目には、Wang and Lyu (2019) の「感嘆経験」(feeling of awe) と「小さな自己感覚」(small-self-perception) を用いた。唾液アミラーゼの測定には、Komori et al. (2017) と同様、ニプロ社製のモニターとチップを使用した。自己報告測定の感嘆経験に関してはグループ間で独立した t 検定を、唾液アミラーゼに関してはグループごとに視聴前後での対応のある t 検定を実施した。

研究：2023 年 9 月 19 日と 20 日に、和歌山大学の学部生を対象に、熊野古道の滝尻王子から高原霧の里休憩所まで歩いてもらい、その間に 5 回オンライン調査に回答してもらった。参加者は、熊野古道館で語り部から説明を受け、語り部と一緒に熊野古道を歩く介入群と、熊野古道館にも立ち寄りず、語り部もなしで熊野古道を歩くコントロール群に分類された。研究と同様の方法で、感嘆経験および唾液アミラーゼを測定した。データ分析には、二元配置混合計画分散分析およびフォローアップ反復分散分析を用いた。

4. 研究成果

研究：計 85 名のツアー参加者が質問紙調査に参加した。日帰りツアーの全 64 名の参加者からは 59 名、宿泊ツアーからは全 26 名の参加者が調査に参加した。そのうち、自由記述回答を入力したのは 40 名(日帰りツアー 24 名、宿泊ツアー 16 名)であり、その回答を有効回答とし、データ分析を行った。有効回答を提供した調査参加者の性別は、男性 22 名(55.0%)と女性 18 名(45.0%)であり、平均年齢は 68.5 歳であった。熊野古道訪問の平均回数は 1.2 回で、5 名が 2 回目、1 名が 3 回目であり、大多数の参加者が初めての熊野古道訪問であった。電子データ化された自由記述回答は 1,505 文字であった。演繹的コーディングを用いた分析を行い、感嘆経験を 3 つのカテゴリー(「壮大さ」、「回顧的/大局的瞬間」、「野生動物」)にコーディングした。最も多く報告された感嘆経験は、熊野古道の雄大さに触れることによってもたらされる「壮大さ」(10 名:30.0%)であった。コーディングされた回答数(3 名:8%)は少なかったが、熊野古道の歴史や文化に触れることによってもたらされる「回顧的/大局的瞬間」も熊野古道での感嘆を喚起する刺激となることが本研究結果より示唆された。3 つ目のカテゴリーである「野生動物」には、自由記述回答は分類されなかった。熊野古道には、イノシシ、ニホンジカ、タヌキ、ニホンザル、ウグイスなどの野生動物が生息していると言われているが(三重県立熊野古道センター, 2018)、今回のツアーは団体ツアーであったため、時間的なゆとりもなく、熊野古道での野生動物の生息地までたどり着けなかったことが原因であると考えられる。以上の結果より、語り部と熊野古道を歩くことが「壮大さ」と「回顧的/大局的瞬間」という感嘆経験につながるということが示唆された。

研究：計 51 名の学部生が調査に参加し、25 名が介入群、26 名がコントロール群に割り当てられた。介入群は男性 6 名(24.0%)と女性 19 名(76.0%)であり、平均年齢は 20.2 歳であった。一方、コントロール群は男性 9 名(34.6%)と女性 17 名(65.4%)であり、平均年齢は 19.6 歳であった。独立した t 検定の結果からは、グループ間において「感嘆経験」($t = -1.11, p = .28$)と「小さな自己感覚」($t = 0.49, p = .63$)ともに有意差は認められなかった。同様に、対応のある t 検定の結果からも、介入群($t = 0.57, p = .58$)とコントロール群($t = -0.96, p = .35$)ともに、VR 動画視聴前後で唾液アミラーゼ活性度には有意差は認められなかった。両群の参加者は、7 段階のリッカート尺度で測定した「感嘆経験」($M = 5.22, SD = 4.88$)と「小さな自己感覚」($M = 4.27, SD = 4.43$)をある程度経験していたが、熊野古道に対する理解度は、VR 動画視聴を通して得られる感嘆経験には影響を及ぼさないことが明らかになった。予想とは異なる本結果の解釈として考えられることは、感嘆経験は主にパノラマ的な自然の眺め(Shiota et al., 2007)や森の中の高い木々(Piff et al., 2015)などの視覚情報によって喚起されるという点である。したがって、観光パンフレットを通して得られた熊野古道に関する情報の有無に関わらず、臨場感のある VR 動画によって(Chirico et al., 2017)、両グループの参加者は同程度の感嘆経験を報告したと考えられる。また、実験に使用した観光パンフレットの情報は、感嘆経験をもたらすには不十分であったかもしれない。

研究：計 28 名の学部生が調査に参加し、24 名から有効回答を収集した。13 名が介入群、11 名がコントロール群に割り当てられた。介入群は男生 3 名(23.1%)と女性 10 名(76.9%)であり、コントロール群は男性 5 名(45.5%)と女性 6 名(54.5%)であった。平均年齢は各グループ 20.3 歳であった。二元配置混合計画分散分析の結果に関して、調査地点の主効果(被験者内因子)については、「感嘆経験」($F = 25.42, p < .001$)と「小さな自己感覚」($F = 17.83, p < .001$)は有意であったが、唾液アミラーゼ($F = 1.60, p = .182$)は有意ではなかった。一方、語り部の主効果(被験者間因子)については、「感嘆経験」($F = 0.00, p = .990$)「小さな自己感覚」($F = 0.07, p = .795$)、唾液アミラーゼ($F = 1.47, p = .238$)の全てにおいて有意ではなかった。同様に、「感嘆経験」($F = 0.65, p = .557$)「小さな自己感覚」($F = 0.75, p = .493$)、唾液アミラーゼ($F = 1.01, p = 0.410$)における交互作用はどれも有意ではなかった。しかしながら、各グループの多重比較によるフォローアップ反復分散分析の結果からは、語り部と歩いた介入群は、第 1 調査地点と第 2 調査地点

の間と第4調査地点と第5調査地点の間で、「感嘆経験」($F = 12.72, p < .001$)と「小さな自己感覚」($F = 15.31, p < .001$)の両方で有意な向上を示した。一方、同様の結果は、コントロール群の分析結果からは得られなかった。これらの区間には、高原熊野神社、不寝王子、滝尻王子などの魅力的な観光名所があり、それらに関する語り部の情報が感嘆経験をもたらした可能性が考えられる。以上の結果から、語り部は熊野古道を歩く観光客の感嘆経験を高める役割を担うことが示唆された。しかし、この結果は自己報告測定では支持されたが、生理心理学的測定(唾液アミラーゼ)では支持されなかった。

表1. フォローアップ反復分散分析および多重比較の結果

| | 調査地 1 <i>M (SD)</i> | 調査地 2 <i>M (SD)</i> | 調査地 3 <i>M (SD)</i> | 調査地 4 <i>M (SD)</i> | 調査地 5 <i>M (SD)</i> | <i>F</i> |
|----------------------|-----------------------------|-----------------------------|-----------------------------|-----------------------------|-----------------------------|----------|
| 感嘆経験 (介入群) | 4.46 _a (1.23) | 5.13 _b (0.80) | 5.33 _b (1.02) | 5.46 _b (1.16) | 5.85 _c (0.95) | 12.72** |
| 感嘆経験 (コントロール群) | 4.39 _a (1.59) | 4.93 _a (1.08) | 5.25 _a (1.01) | 5.73 _a (1.06) | 5.91 _a (1.23) | 12.89** |
| 小さな自己感覚 (介入群) | 4.03 _a (0.83) | 4.82 _b (1.06) | 4.90 _b (0.97) | 5.18 _b (1.09) | 5.69 _c (1.06) | 15.31** |
| 小さな自己感覚 (コントロール群) | 4.27 _a (1.65) | 4.61 _a (1.24) | 4.73 _a (1.18) | 5.06 _a (1.21) | 5.39 _a (1.27) | 5.02** |
| 唾液アミラーゼ (介入群) | 2.85 _a (1.41) | 2.68 _a (1.06) | 3.82 _a (1.49) | 4.14 _a (2.37) | 3.48 _a (1.33) | 0.68 |
| 唾液アミラーゼ (コントロール群) | 2.80 _a (1.67) | 2.83 _a (1.64) | 3.82 _a (1.49) | 4.14 _a (2.37) | 3.48 _a (1.33) | 1.59 |

注) 下付きアルファベット (e.g., a と b) を共有しない連続した行 (e.g., 介入群の感嘆経験の調査地 1 と調査地 2) の平均値は有意差が認められたことを示す。「感嘆経験」と「小さな自己感覚」は7段階のリッカート尺度で測定し、唾液アミラーゼはkIU/Lで測定した数値を平方根変換した。

結論: 本研究では、世界遺産の参詣道である熊野古道を歩くことで、意味深い心理的経験である感嘆経験が高まるかを明らかにすることを研究目的とした。研究、の結果から、熊野古道を歩くことで感嘆経験がもたらされることが明らかになり、日常のウォーキングでは感じる事が難しい感嘆経験を得られることがうかがえた。また、観光パンフレットを通して得られた熊野古道に対する理解は、感嘆経験に影響を及ぼさなかったが、語り部による情報は影響を与えることが明らかになった。熊野古道を歩くことで得られる感嘆経験を向上させるためには、熊野古道に関する深い知識を提供する語り部が重要な役割を担うことが示唆された。語り部を含む地元の観光ガイドは、持続可能な観光開発にとって不可欠であり (Salazar, 2012) 熊野古道での観光経験を高める上で重要な役割を果たすと考えられる。一方、このような感嘆経験に対する語り部の効果は、生理心理学的指標である唾液アミラーゼには反映されなかった。自己報告測定と生理心理学的測定の間で対照的な結果が得られたことは、調査設定 (e.g., 実験室 vs. 非実験室) が結果に影響を与えることを示唆している。観光研究における生態学的妥当性の重要性を考慮すると、非実験室環境における感嘆経験について、唾液アミラーゼ以外のさまざまな生理心理学的測定を用いたさらなる調査が必要であろう。本研究がこれまでのスポーツツーリズム研究で等閑視されてきた感嘆経験を、世界遺産の参詣道「熊野古道」と語り部という視点から明らかにしたという点は学術的にも実践的にも有益であり、今後は国内観光分野において感嘆経験のさらなる知見の蓄積が求められる。国内のアウトドアスポーツツーリズムを推進していくためには、感嘆経験のような日常生活でのウォーキングでは得られない心理的経験を喚起する要因 (e.g., 語り部) を理解し、プロモーションやマーケティングに活用していくことが必要不可欠だと考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 伊藤 央二、山北 隆太郎 | 4. 巻 7 |
| 2. 論文標題 Tamarack Ottawa Race Weekend 2023におけるサブリメンタル観光行動 | 5. 発行年 2024年 |
| 3. 雑誌名 イベント学研究 | 6. 最初と最後の頁 39～44 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|---|-------------------|
| 1. 著者名 伊藤 央二、河野 慎太郎 | 4. 巻 24 |
| 2. 論文標題 世界遺産の参詣道「熊野古道」を歩くことで得られる感嘆喚起経験 | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 観光学 | 6. 最初と最後の頁 1～8 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.19002/AA12438820.24.1 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 Ito Eiji | 4. 巻 18 |
| 2. 論文標題 Understanding Cultural Variations in Outdoor Tourism Behaviours for Outdoor Sport Tourism Development: A Case of the Blue Mountains National Park | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 Tourism Planning & Development | 6. 最初と最後の頁 371～377 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/21568316.2020.1807401 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 7件）

| |
|---|
| 1. 発表者名 Eiji Ito |
| 2. 発表標題 Sport tourism development in Japan |
| 3. 学会等名 2024 KUSHM Sport Tourism Seminar（招待講演）（国際学会） |
| 4. 発表年 2024年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Eiji Ito, Shintaro Kono, Kei Tanisho, Tsukasa Kawanishi |
| 2. 発表標題 Awe on Kumano Kodo with kataribe: Integrating self-report and psychophysiological measurements |
| 3. 学会等名 Asia Pacific Tourism Association 2024 Conference (国際学会) |
| 4. 発表年 2024年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Eiji Ito, Shintaro Kono, Kei Tanisho, Tsukasa Kawanishi |
| 2. 発表標題 Unveiling the impact of kataribe guides on awe experiences along Kumano Kodo |
| 3. 学会等名 The 15th Biennial Australia and New Zealand Association for Leisure Studies Conference (国際学会) |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Eiji Ito |
| 2. 発表標題 Exploring the synergy between Kumano Kodo and aikido for sport tourism development in Wakayama, Japan |
| 3. 学会等名 The 9th Asian Forum of the Sport Sciences for the Next Generation (国際学会) |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 伊藤 央二 |
| 2. 発表標題 スポーツツーリズム：スポーツで人を「動かす」仕組みづくり |
| 3. 学会等名 第25回日本運動疫学会学術総会（招待講演） |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Eiji Ito, Shintaro Kono, Kei Tanisho, Tsukasa Kawanishi |
| 2. 発表標題 Does understanding of World Heritage pilgrimage routes foster awe-inspiring experiences?: A case of a Kumano Kodo walking virtual reality video |
| 3. 学会等名 The 17th Canadian Congress on Leisure Research (国際学会) |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Eiji Ito |
| 2. 発表標題 Sport and rural tourism development: The case of Wakayama |
| 3. 学会等名 Building Rural Tourism Resilience: Benchmarking Approaches from Japan and Australia (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Eiji Ito |
| 2. 発表標題 Cultural variations in outdoor tourism behaviors in the Greater Blue Mountains World Heritage Area |
| 3. 学会等名 SEAMA 2020 (国際学会) |
| 4. 発表年 2020年 |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|-------------------------------|-----------------------|----|
| 研究協力者 | 河野 慎太郎 (Kono Shintaro) | | |

6. 研究組織（つづき）

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|---|-----------------------|----|
| 研究協力者 | 谷所 慶 (Tanisho Kei) (80455443) | | |
| 研究協力者 | 川西 司 (Kawanishi Tsukasa) (60883569) | | |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
| | |